

〈はじめに〉

「ヒストリエ」というマンガ(岩明均作)があります。マケドニア帝国の書記官となったエウメネスという人が主人公の物語です。そのマンガの中で、まだ少年だった貴族の子エウメネスは、海難事故に遭い、ボアという辺境の村に流れつきます。村人に助けられたエウメネスは、衣食住の恩恵を受ける代わりに、それまで自分が書物で学んださまざまな知識を村人に講義します。ギリシア神話を、それからヘロドトスを何年もかけて伝えて行くのですが、その場面で、作者はエウメネスに、こう語らせます。「蓄えを提供する一方の私に得るものが無いか」と決してそうではない。書物から得た知識の多くが、ほったらかしにしておけばいつまでも“他人”なのだが、第三者にわかりやすく紹介して見せることで初めて“身内”になっていく」◆今回のテーマは俳句です。その俳句と、このギリシアのマンガのエピソードはどのように関係するのでしょうか。それは、人間の心は、何かに表現されて自分の外に出されなければ、明確に認識することはできない、という点です。たとえば知識のような客観的で論理的なものでさえ、それが本当に自分に意識され、そして役立つものになるためには、だれかにそれを語り、共有するというプロセスが必要になります。では一方、俳句はどうでしょうか。俳句は、知識ではありません。それを詠む人の一瞬の心の有り様を表現するものです。しかし、エウメネスの知識と同様に、それがいったい何であるのか、はじめは詠み手にも掴めていません。そのうまく言い表せない「何か」は、景色や季節や事物に置き換えられ、喩えられ、俳句となることで、はじめて、「ああ自分は、まさしくこんなことを感じていたんだ」と気づくことができます。それが俳句という活動の本質です。そして俳句の読み手(読者)は、詠み手(作者)の心が込められた句を読み、作者と同じ体験をしたような感覚を味わいます。そのようにして心に残った俳句は、心の中に棘のように刺さって、四季が巡るごとに蘇り、消えることはありません。◆いま、ことばのテーブルでは、子どもたちに俳句を作ってもらっています。子どもが作ってきた俳句を読むことは、自分の楽しみになっています。それは、日頃のおしゃべりだけでは知ることができない、子どもの心に触れることができるからです。心に触れる、という点では、本質的に、芭蕉の句も子どもの句も変わりはありません。「あー、こんなことが心に浮かんだんだ」と、鑑賞する側としては共感します。そして、句を作った子ども自身にも、「あーこんなことを自分は感じたんだ」という、自分に対する共感や発見があるのではないか、と思います。◆俳句は、もとより学習課題ではありません。俳句を作るほとんどの人にとって、それは趣味であり、娯楽です。だから、俳句に関心を持ち、作ってみようかなと思う子ども(大人も)だけが、すればよいものです。今回は、言語習得における俳句の意義(効果)を、いくつかお話しする予定です。それらはもちろん本当で、大切なことなのですが、その一方で、そのためだけに俳句を学ばせてはいけないと思います。最近、自分自身も俳句を詠み始めて、一句できたときのうれしさを知りました。そのうれしさは、理屈抜きのもので、発達障害の子どもが、ある日、ふと、心に浮かんだ俳句をノートに書きつける。学習ではなく、自分の楽しみとして。そんなことが、あればいいなあ、と思います。